

サトウ・ハチロー（さとう・はちろー）

1、プロフィール

詩から始まり、ユーモア小説、歌謡曲、童謡と多彩な活動をみせる。特に戦後は童謡に力を入れ、童謡復興運動に専心し、童謡の正統を守り育てようとした。愛唱歌多数。

<生没>

1903(明治 36)年5月 23 日 ~ 1973(昭和 48)年 11 月 13 日

<代表作>

『爪色の雨』(詩集)

『叱られ坊主』(童謡集)

『おかあさん』(詩集)

<青森との関わり>

父は佐藤紅緑。「わたしは津軽の血を受けたばりばりの青森県人です」と言う。福士幸次郎の影響で詩作。

2、作家解説

東京に生まれる。本名佐藤八郎。父は佐藤紅緑。生まれてすぐ、当時佐藤家に寄寓していた真山青果に育てられた。中学は八つの学校を転々とし中退。15歳の時福士幸次郎が引き受け、一緒に小笠原諸島父島に行き二人の生活が始まる。ここでの生活は4カ月ほどであったが、以後の人生を決める運命的なものであった。詩作に興味を持ち、幸次郎の紹介状を持って西条八十の門を叩き童謡を学ぶ。大正 10 年3月号の「金の船」に「笹の船」、同年6月号の「童話」に「話し声」、13 年 12 月号の「金の星」に「イエス・キリスト」が掲載される。その後「少年倶楽部」「コドモノクニ」「読売新聞」「小学男生」「週刊朝日」「小学少女」「少年王」「婦人グラフ」「少女画報」「童謡」「少女世界」等に童謡を発表。14 年の童謡詩人会のメンバーにも加わり、昭和5年刊行の『年刊新興童謡集』にも作品をよせた。大正 15

年5月には詩集『爪色の雨』で詩壇に地位を確立、昭和 10 年には『僕等の詩集』もある。

昭和の初めごろからは、エノケンらのプペ・ダンスの文芸部主任として、菊田一夫らとともに軽演劇の台本を書いたり、ユーモア小説や随筆をさかんに書いた。また、昭和5年の「麗人の唄」をはじめ歌謡曲もてがけ、「もずが枯木で」「目ン無い千鳥」のヒット曲や終戦直後の「りんごの歌」「夢淡き東京」「長崎の鐘」などの愛唱歌も多い。

戦後は「赤とんぼ」を中心に童謡に打ち込み、木曜会を創立、童謡復興運動に専心した。『少年詩集』(26年)『叱られ坊主』(28年)『木のぼり小僧』(29年)『スカンクカンクプウ』(35年)『タムタムナムナム』(38年)などの童謡集のほか、『童謡のつくり方』『ボクの童謡手帖』などの著書もある。また、33年9月以来のテレビのタイトル詩「おかあさん」はその豊かな抒情性によって好評を博した。29年芸術選奨文部大臣賞、41年紫綬褒章、48年勲三等瑞宝章の栄を受けている。

3、資料紹介

○『おかあさん』

図書

1972(昭和 47)年2月 25 日

180mm×155mm

詩集。昭和 33 年9月以来のTBSテレビのタイトル詩「おかあさん」を収めたもの。全3冊、220編の詩が収録されている。昭和 36 年初版発行、以後版を重ね、昭和 47 年2月 25 日発行のもので実に 376 版を数える。その豊かな抒情性が読者の共感を呼ぶ。